

# 古代炉復元したたら操業

## 安来で島大生ら体験

古墳時代から奈良時代にかけて行われた、たたら製鉄の復元操業が14日から17日まで安来市安来町の市立図書館前であった。最終日は39名の「鍛(けら)」ができ、参加

者はものづくりの原点といえる製鉄作業の苦勞を学んだ。

図書館に隣接する同市の和鋼博物館が主催。「たたらと現代製鋼」の集中講義を受ける島根大

学3年生11人、日立金属安来工場の新入社員13人が参加した。

国選定保存技術保持者で日刀保たたら村下(技師長)の木原明さん(74)が島根県奥出雲町の指導で、原料の準備や土を高さ40センチまで盛った炉床作り、粘土をれんが状にして積んだ炉(幅42センチ、奥行き48センチ、高さ1・1メートル)作りなど昔の作業を体験した。

この日午前5時前、火入れ式をして作業開始。鋤出しまで10時間半、木炭を計206キ、砂鉄112キを少しずつ炉に入れ、足踏み式のふいごなどで風を送り続けた。

学生らは、木原さんに「炎は砂鉄が多すぎると黒っぽく、少なすぎると青くなり、ヤマブキ色の状態が一番いい」と教わり、絶えず炎の色を見な



炎を上げる炉の前で、木原明さん(中央奥)からたたら製鉄について話を聞く島根大学の学生ら。安来市安来町

がら砂鉄の量を加減していた。

生物資源科学部の木村隆志さん(22)や木坂寿子さん(21)らは「これが伝統の工業だと思った。昔の人がつくった文化が受け継がれていけばいい」と話した。